

2013. 4月号

総特集* ヴィクトール・E・フランクル

『夜と霧』にしがみついて生きてきた

坂上和子

二〇〇九年一〇月七日、霜山徳爾先生が九〇歳でお亡くなりになった。そのことを翌日の新聞で知った。葬儀は一週間後とあり、日時会場も記されていたが、その日は何も手につかず、翌日、思いきって住所を頼りにご自宅に伺った。先生は棺の中に眠っておられた。ネクタイをしめ、背広を着て、教壇に立っておられたお姿で——。

弔問客はおらず、私はひとり、先生のお顔を拝しながら、「ありがとうございます」とひれ伏し、あとは声にならなかった。帰宅後、恩師への思いを朝日新聞「声」に投書した。

『夜と霧』の翻訳者、霜山徳爾先生がお亡くなりになった。三六年前、私は専門学校^{とくじ}の夜学生として霜山先生から臨床心理学を教わり、『夜と霧』に出会った。ナチス強制収容所を生き延び、その体験を綴った精神科医の著者である。四〇〇万人ものユダヤ

人がガスで殺され、餓死し、限界状況における人間の姿が描かれている。当時私は一九歳。児童養護施設を出てアパートを借り、学費はバイトで稼いだ。一〇〇〇円で一〇日を生きる生活でも、先生の授業後はいつも感謝の思いがこみ上げた。あの授業がなければ、親のいない境遇を嘆き、同じ敷地で学ぶ昼間の大学生をやっかんただろう。先生の言葉は人生の節目、節目で語りかけてきた。専門学校卒業後も順風満帆とはいかず、離婚、失業、途方にくれた日々があった。そんな時、『夜と霧』にしがみついて読むと「なんのこれしき」と思えた。霜山先生、『夜と霧』を遺して下さってありがとうございます(二〇〇九年一〇月一六日付)。

霜山先生との出会い

忘れもしない。霜山徳爾先生の初回の授業の日のことを。先生の

「臨床心理学」は水曜の夜にあり、その日、授業を休んだ私に友達
が言った。「バカねえ、霜山先生の授業を休むなんて!!」授業を一
回休んだだけでもバカ呼ばわりされたほどの人気ぶり。学生たち
にとって『夜と霧』は教科書同然。翌週から教室の最前列、教壇の真
向かいのかぶりつきの席が私の指定席になった。

座った席から先生がノートを取り出すしぐさ、かばんの取っ手が
壊れてひもで結んでいるのもよく見えた。

「みなさん、昼間働いて大変ですねえ、私も今朝から○大学行って、
次に△大学院行って、それからここでしょ、手一杯なんです、み
なさんの熱心さが好きです。私の方針は昼と夜の学生の区別はしま
せんよ、試験もね」

「私はちつともえらい先生じゃありません。ただ患者さんに向き
合うときは言葉を丁寧にするね、ドアを開けてこちらから迎える、
そういう小さなことを大事にしています」

「私は一五年戦争すべて経験しています。鹿児島県の鹿屋でたま
たま特攻隊の出撃を見ました。まだ一八か一九の幼い顔の五名のパ
イロットでした」

「自殺というのは宗教で禁じなければならないほど、人間は死に
魅せられる弱い存在です」

「アウシュヴィッツでは一日にわずかなスープと一切れのパン。
寝床は蚕棚に大人が折り重なって寝る。その寝床が確保できなくて
パンと取り替えた人もいます」

「こうした極限においても人間は美しい夕日に感動し、励まし、

支え合いました」

アウシュヴィッツの話になると先生は教壇をおりてきて、学生た
ちの顔を見ながら「ポーランドの冬はマイナス二〇度にもなるん
です、そんな中で朝まだ暗いうちから出かけて固く凍りついた土を
つるはして掘るんです、分かりますか？ マイナス二〇度って？」ま
るで映像を見るようになりアルサで話しかけてくるので、学生たちは
震えあがって聞いた。

上智社会福祉専門学校(社専)に入学したのは一九七四年、一九歳。
何度か引越しをして講義ノートは無くしてしまっただが、今でも先
生の声や黒板に書かれた *dementia*, *melancholy* などを思い出す。

当時はカトリック系の児童養護施設を出て自立の一步を踏み出し
たばかり。学校選びはどこでもよかった。働きながら保育士資格さ
え取れば。とにかく、自分で食べていける仕事につきたかった。
社専を選んだのは先輩が通っていて「うちの学校には霜山先生って
面白い先生がいるのよ、『夜と霧』っていう、アウシュヴィッツの
本を訳した人」、この一言である。私はその本をシスターに勧めら
れて読んでいた。「そんなえらい先生が夜学に来て教えてくれるわ
け？ そこにするー」

生活は厳しかった。昼間は学校裏の印刷屋で時給なんぼのアルバ
イト。六時まで働き、授業開始は六時〇五分。走ってぎりぎりセー
フ。今は施設の子どもたちも専門学校や大学に進学できるようにな
ったが、当時は大学なんてとんでもない。高校に行けただけでも恩
の字で、七割ぐらいの同級生が中卒で巣立っていった。高校卒業後、

もすぐに社会に出たわけではない。一年間は施設に残り、職員寮に移って、今度は職員として働き、毎月給料から高校の学費を天引きで返し、わずかな貯金をもって社会に飛び立った。アパートは羽田近くの私鉄沿線の各駅しか止まらない梅屋敷駅。冷暖房も風呂も無し、トイレ共同、四畳半で月七〇〇〇円。

社専は四谷にあり、授業が終わるのが二一時。それからサークルや研究会に出たりして家に着くのが二四時。遅い時間は電車も間遠で、駅のホームで立ちんぼう。冬はとくに辛い。空腹、寒さ、吹きさらしの風の中、そんなときでも霜山先生の授業を聞いたあとは、暖かかった。『夜と霧』の解説には次のような記述がある。

「不潔と墮落の中に追いやられ、いためつけられ、打ちのめされ、拷問にかけられ、飢えにさらされ、そしてついには労働によって撲滅されるか、ガス室の大量死刑執行によって（ドイツ人に言わせると）一掃されてしまった」。霜山先生はこれらのことを、学生たちに具体的に教えてくださった。生活が苦しいとはいえ、私が生まれるわずか十数年前、実際に起きたことを思うと、自分がいかに恵まれた時代にいるかを思った。空襲もない、誰かに命令されて働いているわけでもない、こうして勉強ができる身分。疲れたとかおなかがすいたとか、寒いとか、そんなことは甘ったれ！ 社専は上智大学の敷地に併設されているので、こちらが門に入る時間に昼間の学生たちが出て行く。すれ違いざまに、彼らをうらやましく思う気持ちも最初のころはあったが、先生の授業を聞いていると幸福の物差しが変ってしまった。

卒業は二二歳の春。まさか、ここで教わったことが後の私の仕事に深くかわわってくるなんて、当時は知るよしもなく、保育士資格を得て無事卒業。

難病の子どもの生と死に寄り添って

その年の春、私は晴れて新宿区に就職。公立の保育園で保育士として働くことになった。苦学してようやく得た資格を生かして万々歳である。その後、結婚して二児を授かり、働きながら育児をする充実した日々もあったが、八年しか続かなかった。同居の義父が倒れ、夫が入院、介護と育児が一気に押し寄せ、人生はなんとままたらないものか……。せつかく手にした公務員、天をうらみながらの退職である。しばらくして新宿区の障害児の通園施設から声がかかった。そこで「在宅訪問指導員」という非常勤の仕事が待っていた。「在宅訪問指導員」とは地域の福祉施設や保健所、保育園、在宅などに職員が出向く仕事で、乳幼児の発達を理解していることが採用条件だった。病院にも出向いた。新宿区は高度医療の病院が多く、病院にまで職員を派遣する事業は区独自の行政サービスで、全国に先駆けたものだと言える。

この時は新宿区の職員として病院に入行って行ったが、のちにボランティア活動に発展し、この仕事が現在のNPO法人の源流である。この仕事は一九八九年から一〇年間従事した。訪問先は区内にある東京女子医大、国立国際医療研究センターなど高度医療の病院で、二十数名の難病の親子とかかわった。病院を訪問するときは保育士

と心理士など必ず二人で訪問した。一人が親の話し相手、一人が子どもの遊び相手をし、きめ細かく対応した。ウエルドニツヒホフマン病、ヒルシユスプリング病、オンディーヌ症候群、私たちが聞いたこともない病気に苦しむ子どもたちがいた。手術成功率は五〇パーセントという重い心臓病の子や、抗がん剤で髪が抜けた子どもたちの病室にもおもちゃを持って入っていた。するとぐったりしていた子が起きて笑ったり、しゃべったり、音楽に合わせて歌をうたったり、普段医療スタッフが見たこともない変化を見せるようになった。子どもの状態が悪くなるとクリーンルームやICUという特殊な部屋に移動する。亡くなる前日のような厳しい状況であつても私たちは子どもに呼ばれ、家族でも制限されるような場におもちゃを持って入っていくようになった。

ある日、国立国際医療研究センターの病棟師長から声をかけられた。「遊んでやって欲しい子がいるんです」。白血病のAちゃんは母親が出産のため、一人ぼっちで個室にいた。帰り際、Aちゃんは私の服をつかんで帰らないでと泣いた。帰宅してもAちゃんのことをずっと気になった。子どもの死にも幾度かあつた。そういう日は家に帰っても家族と会話も出来ず、気がおかしくなりそうだった。こうした仕事の困難をたびたび、霜山先生に訴えた。「とても難しい仕事です、どうしたらよいでしょう」。すると先生は「答えはあなたの中にあるのです。あなたの中にしかありません」。私は霜山先生の授業に出会ったことが偶然ではなく、必然だったことを理解するようになった。

子どもの涙を笑顔に変えたい

一九九一年、国立国際医療研究センター小児病棟に、遊びのボランティアが誕生した。遊びのボランティアは子どものベッドサイドやプレイルームで九〇分遊ぶ。この間、疲れた親に休息を提供して喜ばれている。これは八九年から「在宅訪問指導員」の仕事を二年間みていた医療スタッフたちが遊びの理解したことが大きい。

「ここは子どものアウシユヴィッツみたい」。はじめの頃、私はそう思った。遊びを奪われた寒々しい環境。ベッド上が生活のすべて。友達やきょうだいにも会えず、食事、行動、面会の規制や制限、テレビが子守代わり。中でも悲惨なのは付き添いのいない乳幼児である。ベッド柵にしがみつき、声が囁れるほどママを呼び、その表情はおびえ、震え、涙も涸れ果てている。なのに、誰もその子を抱かず、素通りするのは異様だった。

先ほどの二歳の白血病のAちゃんのお母さんは、「特別なことをしなくても、誰かがそばにいてくれるだけでも安心です」と言った。Aちゃんはその後、亡くなってしまったが、一番付き添ってあげたときに付き添えなかつた親の心情を思うと、悲しみに追い打ちをかけたことであろう。『夜と霧』の中には「異常な状況においては異常な反応がまさに正常な行動である」とあるが、保育士から見ればこんな異常な状況が、病院では日常である。私たちも廊下を歩きながら泣いている子を見ると、だんだんに慣れていくことに危険を感じた。宿泊施設も備わったよほど恵まれた子ども病院は別として、

多くの総合病院の小児科はこうした問題を抱えている。私たちは病院に置かれている子どもたちの実態を知らなすぎる。子どもの泣き声が社会に届かないからである。社会から隔離された怖さはアウシユヴィッツが教えている。

「坂上先生、どうかボランティアで来て下さい」という親たちの声に背中をおされ、医師と看護師長と親たちも交えて、「感染、プライバシー、事故の管理責任」などについても、時間をかけて話し合いながら、保育士ら六人でスタートした。

この活動は二〇一三年の今年で二二年になる。ずいぶん長いこと小児病棟にいるが、医療者を告発しない一貫した態度をとってきた。なぜなら医師たちもナースも誠心誠意患者につくし、目の周りにクマをこしらえながらいっばいいっばいだからである。ただ、病院が社会とのつながりがないため、社会にどういう人たちがいて、具体的にどうやって助けてもらったら患者も親もスタッフも助かるのかを知らないのである。一般の人たちもハードルが高いために病院を敬遠していることもある。私たちは通信を発行し、ホームページで、子どもとボランティアの関りや、ボランティアの効果を発信している。活動先が高度医療の病院であるので、親子がナーバスになっている。活動先が感謝されることばかりではない。それでも私たちは子どもの涙を笑顔に変えたいと走り出した。寒々しい入院環境を少しでも和らげよう——。現在小児病棟二七床に今では七〇人のボランティアが働いている。現職の保育士や教師、造形の先生、大学生、年齢や職種もいろいろな人が力を合わせ、年間延べ

一〇〇〇人のボランティアが延べ九〇〇人の子どもたちを応援する活動に発展してきた。この間、東京医科歯科、順天堂医院等六つの小児病棟にも広がり、社会運動となって注目されてきている。

九一年の活動のスタートから今日まで、遊びのボランティアの歩みをざっと振り返ってみると、ジェットコースターに揺さぶられるような日々があった。「離婚」、「大学進学」、「NPO法人設立」いくつもの転機がやってきた。

最初の転機が「離婚」である。二〇〇〇年、当時四五歳で離婚。主な原因はこのボランティアにある。九一年にボランティア活動を組織化した当時の私は三六歳。息子たちは幼稚園児と小学生だった。九五年には「病院で子どもが輝いた日」という本を出した。すると読者や病院から「うちの病院にも遊びにきて欲しい」と頼まれるようになった。いずれも高度医療の病院だったり、長引く入院児の親からであれば、とても断れず、一日に二つの病院をはしごしたり、夜まで出かけたりしていた。帰宅が夜一〇時を回ることもあり、夫は子育てや主婦業を放ってボランティアに出かける妻に愛想をつかした。当然であろう。事実、私はわが子の誕生日でも、その日がボランティアの日であれば、誕生会は後回し、クリーンルームで待つ子どもを優先した。ボランティアと言えど責任がある。今でも家族を犠牲にしてきたことは心が痛むが、とても放つてはおけなかった。わが子と同じ年頃の子どもたちだったからよけいに——。

次の転機は「大学進学」である。離婚した当時、家を出てマンションを借りて「人生一から仕切り直し」というとき、手持ちのお金

が三〇〇万円。このお金を何かに投資しようと思った。それが学問だった。翌年、昼夜開講制の明治学院大学の社会学部社会福祉学科に入学。その頃は「在宅訪問指導員」から転職して、週三日、同区の子ども家庭支援センターのワーカーとして働き、ボランティア活動も継続しながら、ほとんどの時間を大学で過ごした。ケースワーク論、NPO法、運営論、社会福祉調査などを学びながら、四〇代半ばで学問が出来ることがどんなに嬉しかったか。三年からは仕事も辞めて、脇目もふらず、卒業論文にとりかかった。大学を卒業したのは二〇〇五年。五〇歳だった。

三番目の転機は「NPO法人の設立」である。「せっかく大学で勉強したんだからNPO法人にしよう」と動き出した。これが「NPO法人病氣の子供支援ネット遊びのボランティア」の発足である。仲間らと何日もかけて定款や細かい書類の作成。都庁や法務局、役所に何度も足を運んだ。このNPOには何度も泣かされた。もちろん、今も。

どしゃぶりの雨に打ちのめされながらNPO

二〇〇六年はNPOの立ち上げに追われながら一方、もう一つの大きな事業に取り組んでいた。ボランティア設立一五周年記念行事である。会場は明治学院大学の講堂、講師はカナダのトロントこども病院からボランティアコーディネーターを招聘した。会場にいた二〇〇人の日本人が一番びつくりしたのは「私たちの病院は親がいなくても子どもを一人ぼっちにさせません、そのために、子ども病

院三〇〇床に一二〇〇人のボランティアがいる」と聞いたことだった。これだけの人がいて「キッズファースト」の理念が実現されることを学んだ。しかしこれらの準備のため、どれほど多忙を極めたか。これが役所仕事だったら、部署をあげて総動員、常勤一〇人できりくんでも、目がまわるような仕事量だったろう。カナダとのメールのやりとり、会場交渉、ポスター、案内、名簿、などの細かい仕事を私はたった一人で、寝る間も惜しみ働いた。もちろんボランティアたちも手伝いに来てくれたが、代表でしかできない仕事も山積みだった。こんな日々の中、私は崖から突き落とされるような目にあつた。

ある日、資料の印刷のためボランティアセンターに出かけた。家から自転車で三〇分。帰宅途中、突然空が真っ暗になり、雷が発生、どしゃぶり。雨宿りするところもなかった。濡れついでに雨の中を家まで突っ走った。幸い印刷物一〇〇〇枚はビニールに包んで無事だったが、私は全身ずぶぬれ。部屋に着くと着替える気力もないまま、座りこんでしまった。髪がらばたはた落ちるしずくが目に入ると、それが雨か、涙か、分からなくなり、バスタオルを口にあてて、オイオイと子どものように泣いた。

「自分の頭のアヘも追えないのに、NPOを作ったりして、バカ、バカ。四〇〇万円も払って大学を出たのに、社会福祉をあんなに勉強したのに」、みじめで情けなくて、NPOなんか放り出したかった。この時、家の前からセンターまで直通のバスがあつたのに、片道二〇〇円のバス代が惜しかった。NPOの仕事を抱えながら、生活

費は別に稼がねばならない。当時は近所の保育園でアルバイト。とはいえ、どうがんばっても週三日働くのが精いっぱい。収入は一三万円。ここから家賃と国民健康保険料、住民税を払ったら食費にもこと欠いた。貯金も大学で使い果たし、とうに底をついていた。新宿区役所に出かけ窓口で、「私たちのNPOを助けて下さい」と訴えた。すると「おたくの活動、新宿区民だけが利用するわけではないから、区の税金では出せません」とつれない返事。家にはエアコンも湯沸し器もない。買い物はスーパーで半額になる時間に出かけ、新聞も止めて、これ以上どこを削ればいいのか？ 社会保険もつかず、離婚で遺族年金もなし、老後の頼りはわずかな年金。追い先真つ暗。鼻水、よだれ、汗、涙、ぐちゃぐちゃになったバスタオルを握りしめてこのときはばかりは嗚咽が止まらなかつた。濡れた体のまま、どれだけ時間がたっただろう。ふとオレンジ色の光が見えた。さっきの雨がうそのように止んで夕焼けが始まっていた。雷雨の後なので、いっそう美しい夕日だった。「世界はどうしてこう綺麗なんだろう」、アウシュヴィッツで労働を終えた人たちが夕日をながめた情景がこのときほどぴったり重なったことはない。この日は陽が沈むまで窓辺に立っていた。この夜、布団の中で『夜と霧』を抱きしめながら、「まだ大丈夫、私は生きている、きつと明日がある。なんのこれしき」と自分に言い聞かせた。本を抱きしめ、しがついて寝たなんて、この時が初めてである。

不思議なことは起きるもので泣きわめいたその数日後、長年の活動の理解者から、「今が正念場、二年の期限付きですが毎月あなた

の生活費を寄付させて下さい」と申し出があった。「めっそうもない」という気持ちもあったが、実際には断れない状況にあった。幸い一年後に某製薬企業から数百万円もの寄付があり、(それも四年連続で)無給の生活は一年で脱することができたが、それはNPOに専念し、この間、普及啓発のPR活動ができたおかげである。あのタイミングでなぜ、あしながおばさんが現れたのか？ 今でもそれは謎である。

「坂上さんはどしゃぶりの雨に打ちのめされて、金にもならないのに、病院から評価されるわけでもないのに、そんな活動にどうしてがんばれるんですか？」よく、人に聞かれることである。本当にどうしてだろう？ たぶん、私は幼少時代から何度も崖っぷちに立たされ、その都度、人に助けられてきたからだと思う。

壊れた家庭と三〇〇人の大家族

私にとって家庭は安らぎとはほど遠いところだった。私は大分県別府市生まれ。我が家は両親と四人きょうだい。姉、兄、妹がいる。八歳まで別府で暮らしたが、覚えていてだけで五回は引越しをしている。一〇歳離れた姉は金の卵で上京し、一緒に遊んだ思い出はない。私が小学二年のときに母が死んだ。学校から帰ってきたら母は病院にいて、翌朝午前時に死亡。享年三九歳、睡眠薬自殺だった。「かわいそうに、お母さんのおなかには三カ月の赤ちゃんがいたのよ」。病室にいたおばちゃんの一言を私は今でも忘れない。母の遺体は父が背負って家まで運んだ。タクシー代がなかったからで

ある。学校の先生が一人焼香に見えただけで葬式もなし。父については「怖い」という記憶しかない。父は年に何度か、どこかに行った。出かける時は白い着物に袴をはいて、ほら貝を手にしていた。山伏だったのかもしれない。家にいるときは、いつも仏壇の前で本を読むか、祈っていた。父は子どもたちが歌でもうたおうものなら、「うるさいっ！」と雷を落とす。一部屋の小さなアパートでは、妹とおしゃべりもけんかもできず、父がいると息がつまりそうだった。「とうちゃん、死んじゃえ」、妹とそんなことを言いあつた。ある日、私が「とうちゃんの名前はなんていうの？」と聞くと「くものみち」と書くと教えてくれた。今思うと「くものみち」雲水だったかもしれない。私は二年生で父の名前も知らなかった。酒ぐせが悪く、母は父によく怒られていた。一家の稼ぎ手は母だったと思う。私は時々母の職場についていき、ガラス拭きなどお手伝いをした。母は家の人に「女中さん」と呼ばれていた。夜遅く母は帰ってきた。父のいない時だけが私たちの安らぎだった。その父が残って母が逝ってしまった。お棺に釘を打ち、焼き場で灰になった母を抱いて、私はたった八歳で無常というものを知った。

母の死後、二年後に私と妹はカトリック系の児童養護施設に入ることになるが、それまでの二年は親せきの家を転々とした。兄が中学を卒業したので就職のため上京。私と妹もついていった。時は一九六四年、東京オリンピック開催の年である。右も左も知らない東京で兄と妹と三人の新生活。今から思うと、子どもだけで暮らしていたことになる。当時は家に帰っても誰もいないので、私は町を

ふらついて時間つぶしをしていた。ある日、デパートのエスカレーターに巻き込まれるという大きな事故にあい、養育に欠けるということと私と妹は施設に入ることになった。東京赤羽にあるそのホームの門をくぐったのは小学五年生、一〇歳の春だった。ここで高校を卒業するまで九年間、三〇〇人の他人と一緒に暮らす日々が始まる。その初日、私は生涯忘れられない体験をした。

「オマチシテイマシタ。マサコサン、カズコサン。ココハカミサマノオウチ、アナタガタハカミサマノダイジナコドモ。アンシンシテクダサイ。カミサマハアナタガタニ、シユクフクトオメグミ、タクサンクレマスデス」。私と妹の前に、ペンギンのような黒と白の服を着た外人のシスターがニコニコと両手を広げ、そして抱きしめられた。この方は施設長でサンティーナというイタリア人だった。

私は抱きしめられたことに驚き、「お待ちしていました」と言われてびつくりし、「大事な子ども」と聞いて「誰が？」と思い、「安心して下さい」と聞いて、泣きたくなくなった。こんな大人に会ったことがなかった。

ホームは乳児院から高校生までが二〇〇人、シスターや職員をいれて、三〇〇人くらいの大所帯。中学生や高校生にもなると小さい子どもたちの世話が当たり前。この中にはいろいろな子どもたちがいた。

親せき中をたらい回しにされてきたクラスの子は「私、親を知らないの。名前は拾われた場所が名字で、名前は千支が丁年生まれだから丁子なの、こんな名前大嫌い。あんだ、いいわね、親から名前

つけてもらえて」

ハーフの子は「ママは刑務所にいるの、あたしのママ、パンパンしてたの」。五年生なのにこんなことを口にしてた。

ある時、幼児の入浴を手伝ったら、背中に丸い茶色の模様のある子がいた。「あの子は実の親からタバコの火を押し付けられたのよ」とシスターが涙ぐんで教えてくれた。

シスターたちはこんな訳ありの子らと寝食をとにした。カトリックの修道会が経営するので、朝はミサに始まり、夜もお祈りで終わる。当時は女子だけの施設で、聖歌隊では美しいミサ曲をラテン語でたくさん歌った。クリスマスに聖劇をしたり、復活祭は豪華なご馳走がならび、施設の生活は宗教色で染まっていた。子どもたちの魂の教育に大事なものとして、読書、手芸、コーラス、楽器演奏、登山、キャンプ、スポーツも盛んだった。おかげで今でも登山を趣味としている。

シスターたちはいつもロザリオを手にしてお祈りをとても大事にしていた。清貧の徳^とといって貧しさを享受し、修道服は一枚だけ。「神の前に人は平等である」という教えは私の心のよりどころとなった。もちろん、いいことばかりではない。シスターと衝突もしたし、ボスや上級生からいじめられ、泣かされたことも多々あった。「自殺は最大の罪、地獄行きよ」、シスターのこの教えは中でも辛かった。ホームに入る前の私は今で言えばネグレクト。放置され、よその家で「ごはんのおかわり」も言えない厄介物。五年生で掛け算の九九も満足に言えず、自己評価が低かった。また思春期の私を深く

悩ましたのが顔の傷である。事故のときメガネをかけていたので顔左半分に深い傷を負った。これまで何度か整形手術をしてマシになったが当時はブラックジャック、髪で顔を隠しコンプレックスのかたまり。そういう私をシスターたちは神に招かれた子どもとして祝福してくれた。一人の人格ある存在として――。

運命の受容と感謝を学ぶ

大人になって知ったことだが、私たちきょうだいは四人とも戸籍上、私生児で、父は無国籍者だった。これを書きながら、あらためてひどい人生だったと思う。平和な日本で、高度成長期まったただ中を生きただのに、貧乏くじを引いてしまった。だが、子どもは親も出自も選べない。こんな家は嫌だといっても誰にも代わってもらえない。『夜と霧』でフランクはこんなことを言っている。「人間は苦悩に対して、彼がこの苦悩に満ちた運命と共にこの世界でただ一人一回だけ立っているという意識にまで達せねばならないのである。何人も彼から苦悩を取り去ることはできないのである。何人も彼の代わりに苦悩を苦しみぬくことはできないのである。まさにその運命に当たった彼自身がこの苦悩を担うということに中に独自の業績に対するただ一度の可能性が存在するのである」。確かに苦悩する私は誰かに代わってもらえない。しかし、支え合うことはできる。家庭の崩壊で放り出された私に血縁を越えた三〇〇人の大家族が与えられた。シスターに魂を救ってもらった。とくに外国からいらしたシスターたちには異国の地で、縁もゆかりもないよその国の貧し

い子らのため、言葉や文化の壁を越え、親の死に目にもあえない命がけの生きざまを見せてもらった。親に名前をつけてもらった幸せにも気づかされた。霜山先生の授業では、子どもの生と死の臨床における保育士の役割を教えてもらった。母の死を受容できたのも先生のおかげである。どん底であしながおばさんに助けられ、今もNPOを通して大勢の善意に支えられている。私の孤独や苦悩はこうした支えで私を強くしてくれた。病気の子どもも同様である。親でも代わってやれないのであるが、重い病気であれば、なおさら、たくさんの喜びや愛が子どもたちにも、その親にも必要である。二歳で白血病と闘って逝ったAちゃんに「帰らないで」と服を掴まれたあの感触を忘れてはならない。雷雨に打たれたときで、病気の子どもを放りだすわけにはいかない。

『夜と霧』に、もうひとつ印象的なエピソードがある。死期の近づいた女性がカスタニエンの樹を見ながら「私をこんなひどい目に合わせてくれた運命に対して感謝しています」「なぜかと言いますと、以前のブルジョアの生活で私は甘やかされていましたし、本当に真剣に精神的な望みを追ってはいなかったからです」。

二〇代でこれを読んだときは、こんなひどい運命に対して人は感謝なんてできるだろうか?と思っていた。この人の受けた不幸は並大抵のものではなかったはず。なのに、なんと深い言葉か。最近になってやっと私にもこの人の言わんとすることがわかるようになった。

『夜と霧』にはこのような極限の中で光を放つ言葉やエピソード

があちこちに刻まれている。そして人生は最後まで生きてみないとわからないということも――。

私はこれからもまた『夜と霧』を抱きしめ、しがみつく日がくるだろうか? できればそんな怖い思いはしたくないが、もし、そうだとしても運命の受容に『夜と霧』が力を貸してくれることを信じている。フランクが地獄のような強制収容所を生き抜いて『夜と霧』を遺してくれたことに感謝せずにはいられない。そして日本語に訳して私たちに伝えてくれた霜山徳爾先生にも――。『夜と霧』は私にとって希望の本であり、祈りの本である。

(さかうえ かずこ・保育士/社会福祉士)